


早稲田大学大学院日本語教育研究科


2019年2月


博士学位申請論文審査報告書

論文題目：大学大衆化時代における日本語教育の役割と可能性  
—グローバルシティズンシップの育成をめざした研究  
と実践の試み—

申請者氏名：永岡 悦子

主査 福島 青史 署名 福島 青史   
(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 小宮 千鶴子 署名 小宮 千鶴子   
(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 小林 ミナ 署名 小林 ミナ   
(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

### <本論文の概要>

本論文は、学生選抜の機能が低下し多様な学生を受け入れている大学を「大衆化型大学」と定義し、特に留学生に経営を依存する傾向の強い日本の中規模私立大学の日本語教育と留学生受入れ体制の改善を目的に、高等教育政策と留学生政策の問題点を分析し、グローバルシティズンシップの育成という観点から日本語教育の可能性を提案するものである。

本論文は全 401 ページの大部であり、序論（第 1 章）、本論（第 2 章～第 8 章）、結論（第 9 章）の 9 章構成で、巻末には表・図の一覧、付録がある。各章の概要は以下の通りである。

第 1 章では、研究目的、課題、論文の構成が述べられている。本論文の課題は以下の 3 つである。

課題 1 日本の大学大衆化と留学大衆化はどのように進行してきたのか。

課題 2 大学大衆化と留学大衆化が進行する中で、どのような教育が必要か。

課題 3 大衆化型大学における日本語教育の役割は何か。

第 2 章では、大学大衆化の定義と大学大衆化の過程、それに伴う学力低下問題が考察され、その後、先行研究より、大学で求められる資質・能力として「生きる力」とグローバルシティズンシップが提案された。

第 3 章では、研究の方法とデータの概要について述べられている。本論文は、①大学大衆化に関わる教育政策の研究と、②日本語を媒介としたグローバルシティズンシップ教育 (Global Citizenship Education、以下 GCED) の実践から構成されているが、それぞれの研究の調査方法や主要概念が示される。

第 4 章では、日本の高度経済成長に伴う高等教育政策と留学生政策の史的変遷をたどり、マクロレベルのアクター（政府）の政策決定を分析することで、大学教育（大学大衆化）と留学生教育（留学大衆化）との関係を考察した。

第 5 章では、大学大衆化と留学大衆化が進行する中での大学教育について、大学教員

に対して行われた意識調査の結果が示されている。大学教育および留学生政策のアクターとして、ミドルレベルのアクターである大学学長と、学生を直接指導するマイクロレベルのアクターである大学教員に焦点をあて、留学生教育に対する意識をインタビューすることにより大衆化型大学の留学生教育の問題点を考察した。

第6章では、日本の大学大衆化・留学大衆化に関与するアクターを整理することにより、留学生政策の検証が行われた。さらに、マイクロレベルのアクターである留学生の意識調査を実施し、「大学大衆化と留学大衆化が進んでいる大学こそ、留学生、日本人学生、教職員など、関係者が留学生政策に自覚的なアクターに変容することで問題解決に取り組めるよう、GCEDが必要である」と主張する。

以下、第7章、第8章では、大衆化型大学における日本語教育の役割について述べられる。

第7章では、大学における日本語教育の実例として、NIE(Newspaper in Education) 活動を取り入れた日本語教育の実践(要約文の作成)について分析を行い、日本語教育をGCEDに発展させる学習の可能性について検討された。

第8章では、一般教養科目における、GCEDの実践について述べられた。同実践では、「リベラルアーツ入門」という必修科目の中で、「東アジアと日本語」というテーマの下、日本語をキーワードに東アジアと日本の関係について考え、グローバル化が進む中での日本の役割や、学生自身のあり方について考えた。

第9章では、本研究の結論と今後の課題が述べられた。同結論は第1章で述べられた課題にそれぞれ対応している。

課題1 日本の大学大衆化と留学大衆化はどのように進行してきたのか。

結論1 日本の大学大衆化は、教育の「質」を国立大学で担保し、教育機会の「量」を私立大学が担保するという政府の政策により、私立大学が主要なアクターとなって進出した。さらにこの動きを、一般大衆の高等教育への進学意欲が後押しした。

課題2 大学大衆化と留学大衆化が進行する中で、どのような教育が必要か。

結論2 大衆化型大学で学ぶ留学生の多くは私費留学生であり、アルバイトをしながら生活を支えているため、社会とのつながりの中で日本語を伸ばしていきたいと感じている。大学には生活の基盤であり、大学の学問の根幹となる日本語能力の育成を充実させながら、留学生を受け入れる組織の体制を構築するとともに、社会と留学生をつなぐ仕組みを作り、地域社会の中での国際化の拠点としての役割が求められていると考える。GCED を推進することで、大学全体の国際化への意識を高め、留学生と日本人が共に学ぶ環境を整備することに発展させることができるのではないかと考える。

課題3 大衆化型大学における日本語教育の役割は何か。

結論3 大衆化型大学における日本語教育の役割は、GCED の1 つとして、学生達が最もローカルな「日本語」をグローバルな問題に関連づけて学べるようにすることで、意識の変化を促進できるよう貢献することであると考える。

#### <本論文の評価>

##### 評価できる点

(1) 留学大衆化時代における大衆化型大学の留学生政策の問題点を考えるにあたり、大学教育・留学生教育のアクターとして「マクロ (政策決定者)」「ミドル (大学運営責任者)」「ミクロ (教育実施者・学習者)」の3層を認め、それぞれの横の関係性、および、「大学大衆化」と「留学大衆化」の縦の関係性の2つの観点から論じたこと。これにより、大衆化型大学における日本語教育の現場が構造的、時間的に文脈化され、幅広い視点に支えられた研究となった。

(2) いわゆる「Fラン大学」「マージナル大学」といった名称がでるほど大衆化した日本の大学教育の背景、現状について、留学生政策という観点から丁寧にレビューを行った。大衆化型大学という現実的な教育現場を明らかにすることにより、実践的かつ具体的な提案ができ、変化の時代を迎える日本社会に対する日本語教育の一つの処方を示したこと。

(3) その処方の一つとして、近年、世界的に重要性が唱えられているグローバルシティズンシップ教育の導入を主張し、留学生に対する日本語教育および教養教育にお

いて教育実践を試み、一定の成果をあげたこと。

#### 今後の課題

(1) 本研究では大衆化型大学におけるグローバルシティズンシップ教育の実践の試みについて述べているが、それは現代のすべての大学に共通して必要なことなのではないか。今後は、そのような観点から検証していくことが期待される。

(2) 前半の理論的考察と後半の教育実践のつながりに、やや論理の飛躍がある。「要約」という行為自体の重要性は認めるし、授業にそれを取り入れることの教育的価値にも賛成する。ただ、GCED やバイラムを援用してはいるものの、従来の方法との違いが明らかでない。また、「良い要約文かどうか」の基準には、言語に内在する絶対的なものではなく、「誰が、何のために、誰に対して作成した要約文か」という相対的／動的な視点が外せないものと思われるが、本論文で行われているのは絶対的／静的な分析である。理論と実践活動とのより明確な整合性が必要である。

(3) 「大衆化型大学」という対象の限定は、より現実的で具体的な問題解決手段が得られる可能性があるが、「エリート/非エリート」といった弁別と、そのための教育は社会階層の固定化や再生産を是とするように取られかねない。口頭試問で語られた、これを解決するグローバルシティズンシップ教育を今後も推進してほしい。

#### <本論文の判定>

上記のような課題を残しつつも、本論文は、大学大衆化時代の現実に立脚し、留学生を市民として包摂する留学生政策、日本語教育のあり方を示せたことには大きな意義がある。よって、本論文は、博士（日本語教育学）の学位を授与するに値する論文と認められる。

なお、本論文にあった誤記は、添付の「日本語教育研究科 博士学位 申請論文修正リスト」のとおり修正されたことを確認した。

日本語教育研究科 博士学位申請論文修正リスト

博士学位申請論文 題目	大学大衆化時代における日本語教育の役割と可能性—グローバルシ ティズンシップの育成をめざした研究と実践の試み—	
申請者	永岡 悦子	
修正リスト提出日	2019年 3月16日	
ページ番号・行	修正前	修正後
本文		
中扉表紙	副題の「実践と研究の試み」	「研究と実践の試み」
目次	本文と目次のページ数がずれている	目次を修正
p.2・脚注2	閲覧日の欠落	閲覧日を記入
p.7・7行目	検討を行なう	検討を行う
p.40・10行目	新めて整理する	改めて整理する
p.50・表3-4	フォントが他の部分と異なる	フォントを整える
p.56・章見出し	「第4章 大学大衆化と留学生政策」となっており、概要書は「高等教育政策と留学生政策の変遷に関する調査」となっている。	概要書に揃え、「第4章 高等教育政策と留学生政策の変遷に関する調査」と修正
p.68・脚注13	不必要な改行	不必要な改行を削除し、文章を整える
p.89・図5-1	不必要な改行	不必要な改行を削除し、文章を整える
p.171・5行目	～を佐久間（1999）で示さ	～佐久間（1999）で示さ
p.180・1行目	行頭の1字サゲ	サゲを解消
p.182-3・表7-3	表7-3のローマ数字が横書き	縦書きに修正
p.198・最終行	表7-7	表7-8
p.202-203・表7-9	表7-9のローマ数字が横書き	縦書きに修正
p.205・7行目	番号を示すが、	番号を示すが、
p.205・8行目	表7-8	表7-9
p.207・1行目	表7-10	表7-11
p.213・最終行	中心文を示す。20	中心文を示す。

p.214-216 表 7-13	表 7-13 のローマ数字が横書き	縦書きに修正
p.220・2行目	表 7-13	表 7-14
p.220・下から 7行目	表 7-14	表 7-15
p.220・最終行	表 7-14	表 7-15
p.227・7行目	表 7-15	表 7-16
p.238・3行目	表 7-19	表 7-20
p.239・最終行	表 7-21	表 7-22
p.247・下から 3行目	表 7-27	表 7-28
p.261・2行目	～マクロの話題の中で、	～マクロの話題の中で、
p.263・3行目	～それぞれの概念を川喜田（1967）の KJ 法によって概念を抽出・分類し、	～それぞれの概念を川喜田（1967）の KJ 法によって抽出・分類し、
p.277・最終行	一定の理解を得たことではないか とかがえる。	一定の理解を得たのではないかと とかがえる。
p.280・4行目	留学生の履修が春・秋を通じて 12 名 であり、	留学生の履修が春・秋を通じて 13 名 であり、
p.286・12行目	表 8-17	表 8-18
p.289・5行目	表 8-18	表 8-19
p.289・10行目	表 8-19	表 8-20
p.292・3行目	表 8-20	表 8-21
p.292・12行目	表 8-21	表 8-22
p.315・下から 6行目	～これらには大学教育の中心とな る専門性に加えて、	～これらでは大学教育の中心となる 専門性に加えて、
p.327・17行目 末～18行目	～教育が求められる重要や教育現場 の 1 つである	～教育が求められる重要な教育現場 の 1 つである
概要 概要最初のペ ージ	目次番号が 2 ページから開始	1 ページから開始に改める

<p>概要 p.2・四角 囲みの中の課 題 1</p> <p>概要 p.4・下か ら 5 行目</p> <p>概要 p.6・1 行 目</p> <p>概要 p.6・10 行 目</p> <p>概要 p.10・下 から 14・15 行 目</p> <p>概要 p.11・結論 1 の四角囲み の直後 1 行 目</p> <p>概要 p.12 主 要参考文献</p>	<p>日本の大衆化と留学大衆化はどのよ うに進行してきたのか。</p> <p>決定するミドル、</p> <p>日本は急激な近代化の達成をし、</p> <p>留学数に大きな影響を</p> <p>受講生が授業の中での学びについ て、</p> <p>日本の大衆化の動きに加え、</p> <p>橋本 (2008) の著書「学術あ出版会」</p>	<p>日本の大学大衆化と留学大衆化はど のように進行してきたのか。</p> <p>決定するミドルレベル、</p> <p>日本は急激な近代化を達成し、</p> <p>留学生数に大きな影響を</p> <p>受講生の授業の中での学びについて、</p> <p>日本の大学大衆化の動きに加え、</p> <p>「学術出版会」</p>
---	--	--